

# OUMC

大阪大学山岳会 会報

No.3

2001年4月

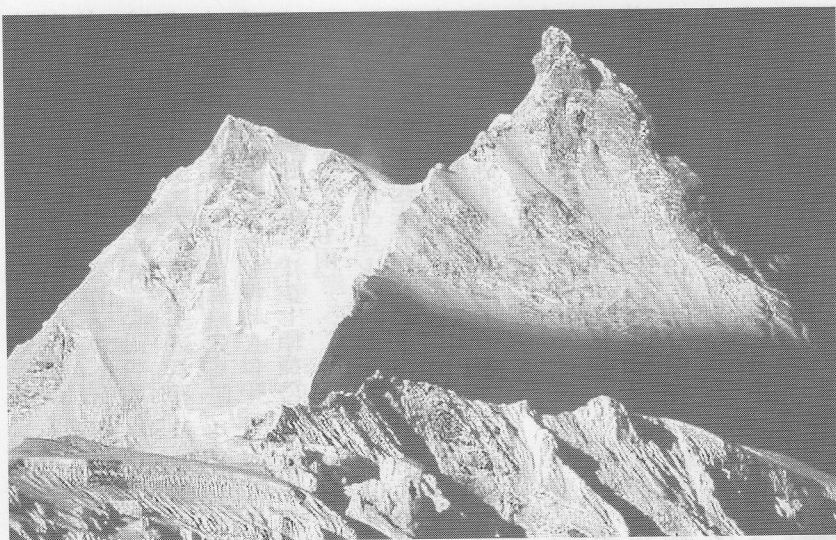
発行 大阪大学山岳会

〒565-0871 吹田市山田丘2-1

大阪大学工学部建築工学専攻 大野研究室内

TEL 06-6879-7635

FAX 06-6879-7637



朝日に輝くマナスル 左が主峰=10月11日午前7時、サマのキャンプサイトから、前沢祐一氏撮影

全体報告

野田 憲一郎

## 30年ぶり P29再訪

### 2000年秋ヒマラヤトレッキング

早いもので、P29初登頂から30年になる。第1次隊から数えると39年、遠征にかかわったメンバーもそれだけ年を取ったし、篠田先生をはじめ物故された方もある。ヒマラヤ自体も初登頂を競う時代はとつとくに終わり、トレッキングも比較的容易になった。初登頂30年を記念して2000年ポストモンスーンにP29を見に行こうという企画は、いいタイミングだったと思う。

旅行代理店のTHIを加えて検討した

結果、次のような計画に落ち着いた。

【日程】10月8日 関西空港→カトマンズ(ロイヤルネパール航空)

9日 カトマンズ→サマ(ヘリコプター)

10日 P29ベースキャンプ周辺までトレッキング

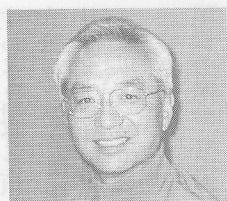
11日 サマ→ポカラ(ヘリ)

12~13日 ポカラ(希望者はダンパス方面へ)

14日 ポカラ→カトマンズ(ロイヤルネパール航空)

15日 関西空港着

【メンバー】田島 汎(L)、木村裕一、坪井和子、坪井実紀、野田 憲一郎、前沢祐一、牧野大輔、大野 義昭(マネジャー) 計8名



10月8日 関空のチェックインカウンターで早速、カルチャーショックの洗礼。搭乗機が4時間50分遅れ。細かい説明などない。ひたすら待って17時50分発上海経由で、現地時間23時55分カトマンズに着。迎えのガイド、ラビンドラ君に会い、空港にほど近いロイヤルシンギホテルに入ったのは24時50分。

9日 サマへ飛ぶヘリは8時30分ごろの予定。8時に国内線待合室に

入ったが、出発時間は未定。もう驚かない。同じ待合室から欧米のトレッカーが次々にポカラやルクラへ飛び立って行く。結局、10時25分、ヘリ2機に分乗して出発。マナスル地区はエベレストやアンナプルナ地区などと違って、特別のエントリーパーミットが必要。それにリエゾンオフィサーまでつく。ヘリは段々畑を越えて急に高度を上げ、ブリガンダキの谷へ入って行く。雲のさらに上のほうに白く高峰が輝き、ヒマラヤに來たという実感がしてくる。マナスル、P29、ヒマルチュリも一瞬、視界に入る。水河の末端をかすめて高度を下げたと思ったら、そこがサマガオンのヘリポート。集落のすぐ上の草地だ。標高3400呎。キャラバンでは10日かかることを50分で来てしまった。待ち受けていたサードのアン・ツェリンはじめ、シエルパ、コック、キッチンボーイ、ポーター総勢10人に迎えられ、ゴンパの前を通って15分ほど下のキャンプへ。山は雲で見えない。

簡素な2階建てのロッジの前庭に

テント4張り、2人づつ泊まる。まずはシエルパたちの給仕で昼食。衣服のちブリガンダキをラルキヤバザール方面へさかのぼる。道は川原に沿って紅葉のブッシュの間を抜け、ヤクを飼う石囲いを越えて行く。ス

ケールの大きな景色で、距離の感覚がつかめない。対岸のトンでもなく高いところにヤクが豆粒のように見える。広い川原を少女が羊を追って行く。2時間ほど歩いたところで細かい、みぞれ気味の雨。引き返す。まだモンスーンは完全に明けてはいないのか。高度のせいでも少し頭痛のメンバーも。夜中にも雨。

10日 6時、モーニングティーと洗面用のお湯で起床。昨日の霧雨は山腹にわずかに白く積もっている。

P29もマナスルも雲の中。日が昇るにつれ、青空が見えてくる。朝食後、ブリガンダキを下ってトレッキングに。サマの下流の集落は街道沿いに伸び、子供たちが「ハロー」と呼びかけてくる。手を合わせ、「ナマステ」と返す。村内に小規模の発電所建設中との掲示があり、電線が張られて

いる。電気が入ったら、ここの生活はどう変わるのだろうか。

坪井親子は、一昨年亡くなった圭之助氏の散骨のため、シエルパ1名を連れ、サマとローの間に最近できたシャウラ集落(チベット人の村)へ。シャウラからは、晴ればマナスル三山がよく見えるとのこと。

ほかの6人はP29BCを目指し、

シャウラへの途中から道標に従って右に折れ、ブンゲン氷河から下ってくる沢の左岸沿いの急な道を登る。ヤクの登る道なので、しつかりしているが、糞を踏まずには歩けない。そのうち見晴らしのよい台地に出る。標高3800呎。正面にP29東尾根が見えるが、頂上付近は雲がとれそうだとれない。下には真っ青な氷河湖。ブンゲン氷河は30年前の写真ではBCより下流まで伸びていたが、

今は何キロも後退

している。対岸

のBC付近は氷

河が消えたので、

深いU字谷を越

えなければ近づ

けない。「あそこ

がC1、あのテ

ラスをたどって

」と牧野、大

野の解説。ここ

で昼食。振り返

ると、チベット国境のパンプーチが輝いている。

昼食後、3班に分かれ、田島、木村はここで山を眺めて下山。野田、前沢はブンゲンゴンパを目指す。坪井から、見晴らしのよい場所に散骨するよう遺骨を預かってきた。牧野、大野はとにかくBCを目指そうと、サードを伴って谷へ降りて行く。

(以下、野田、前沢の行動)

シエルパ1名を連れてマナスル東尾根の縁沿いに台地を登り、約40分で広々したカルカに出る。標高は3900呎を越えたくらい。ゴンパはさらに30分ほど先か。草原のところどころに池塘が光り、雲ノ平を思い出す。雲が晴れば眼前にマナスルからP29まで一望だろう。しばらく雲の切れるのを待ったが、残念にもその気配はない。高度の影響か、体調はもう一つ。ゴンパまで行くのはあきらめ、今回の最高到達地点はこと決める。見晴らしのよい場所を選んで、露岩にケルンを積み、散骨。午後、サマの畑は取り入れの最中。なにやら丈の高い植物を背中いつぱいに担いで村人が行き交う。

11日 未明に晴れてきて、満天の

星。早朝、「マナスルが見えるぞ！」

の声に、テントをとびだす。頂上を

金色に染めた光が、明るさを増しな

がら降りてくる。時々、薄いベール



勢ぞろい サマのゴンパ前で  
=10月11日午前9時、前沢氏撮影



のような雲が通りすぎる。皆、寒さも忘れ、立ちつくす。帰る日の朝に最高の眺めとなった。前沢の4000が望遠レンズが活躍。しかし、P29はついに見えなかった。太陽がキャンプまでさしてきたが、早朝に写真を撮りに出た坪井（Jr）が帰らない。心配して大野やシエルバが動き始めた時、無事帰還。やれやれ。

いよいよ撤収。シエルバがテントや装備を手際よく片付ける。サマのゴンパでお賽銭を1000ルピー寄進すると、極彩色の本堂に招き入れられ、長いお経ののち、皆に白いシルクのスカーフをかけてくれる。約束の10時にヘリが飛来。今回は10人乗り1機。シエルバたちに見送られ、しばらく飛んで谷間の狭い台地に着陸したと思つたら、地面に並んだ20個ほどのポリタンから燃料を補給。近所の村の子供たちが器に少しずつケロシンをもらっている。

11時、ポカラ空港に降り立つと、正面にマチャブチャリが雲をつき抜けている。標高が8900mと低いだけに暑い。空港に近いシャングリラ・ビレッジはポカラ最高級のリゾートホテル。風呂、昼食の後、自由行動。野田、牧野、大野はダウンタウンの探索に。繁華街のニューバザールは、日本の終戦直後のマーケットを思い出す。市内の道は穴ぼこ、

車は警笛と、早いもの勝ち。そこに牛が歩いている。夕食はペワ湖畔のネパールレストラン。食後、マチャブチャリやアンナプルナ連峰が夕日を受けて雲間から姿を現わす。

12日 5時、ホテル発。サランコットの丘からマチャブチャリの朝焼けを見に。丘の頂上には50人ほどが夜明けを待っている。あいにくの曇り空。どろんと夜が明け、皆が帰ったところに山々が見えてくる。左奥にはダウラギリも。牧野、大野はサーダーと1泊でダンプスへ。ほかは市内観光へ。デブズ・フォールでは、川が平地を深く浸食し、ついには流れがトンネル状になり、地中に消えている。ポカラは平地なのに、谷は深い。市内はちょうどヒンズーの「ダサイ祭り」。ペワ湖畔はたくさんの人出。屋台などいろいろ。お寺には生けにえの羊の血の跡も。チベツタンキャンプは新しいだけに予想よりきれい。われわれもマニ車を回し、オンマニベメフムを唱える。

13日 前沢は不調で休養。ほかのメンバーは郊外のノードワへ山を見に。絶好の日和。連なる峰は段々畑越しに一段と迫力がある。午後はベグナス湖。大きなため池でボートに乗る。遠くにマナスル三山がはっきりと見える。夕方には牧野、大野も帰り、前沢も元気に。ポカラ最後の

夜とあってガーデンバイキングを楽ししみ、部屋に集まってワイワイ。

14日 ポカラ空港から山々がくつきり。雲一つない。2時間遅れのカトマンズ行き左窓からはアンナプルナ、マナスル三山、ガネシユヒマール、ランタンと次々に見える。狭苦しいが豪華なフライト。カトマンズでは、世界遺産の古都バクタプールの訪問、市内でお土産などを買う。夕食の後は民族舞踊ショー。こんなに雑多な民族が特別の摩擦もなしに共存しているのは尊敬に値する。

23・55カトマンズ発。翌15日、無事、関西空港に戻ってきた。いい仲間と天候に恵まれ、トラブルもなく、楽しい旅だった。

(昭和35年経済学部卒)

## ベースキャンプ目指して

牧野 大輔

10日午前10時20分、プンゲン氷河が眼下に見渡せる高度約3800mの丘に到着する。ここで初めて、対岸のBC地点を見ることが出来る。ガスは5000mくらいまで下りてきており、P29はおろか、東尾根もようやく下部が見えるのみ。氷河は大きく後退しており、眼下には氷河とは名ばかりのガレ場が続く、荒れた沢が広がっている。

BC地点付近にもすでに氷河はなく、氷河末端もよく確認できない。3次、4次でBCまでのルートとした氷河右岸のカルカは崩壊し、ほとんど残っていない。BC付近のカルカは何とか残ってはいるが、東尾根からの沢が下部で大きく崩壊し、BC手前のカルカも広範囲に崩壊している。とにかく30年で氷河の様相は大きく変わり、荒れ果てた姿になっている。眼下には4次隊の写真で存在が確認されている青い氷河湖が見える。ただ、BCから上部はほとんど変わっておらず、登はんルートはP2、P3間のコルまで明確にたどることが出来る。ここで、後続の部隊を待つて昼食。

ここからBCまでは荒れたプンゲンコラを斜めに横断することになるが、サーダーの判断では片道4時間、私の判断では2時間だったが、結果的にはサーダーの判断が正しかった。11時半、他の4人と別れて、大野と2人でヤクの踏み跡をたどって出発。氷河湖畔まで下り、プンゲンコラに入る。しばらくは踏み跡が残りに、比較的歩き易かったが、30分ほどで踏み跡も消える。ルートは上から見た以上に起伏が激しく、しかも不安定な石とブッシュが続く、高度による頭痛も加わって極端に体力を消耗する。BCに向け左斜めに

ジグザグに進むが、行程は一向にはかどらない。約1時間半進んだところで小休止。この地点はコーラの左岸から4分の1、BCまでの距離の3分の1。BCまでは、さらに3時間を要すると予測され、すでに午後1時を回っていることを考え、ここでBCへ向かうのは断念する。

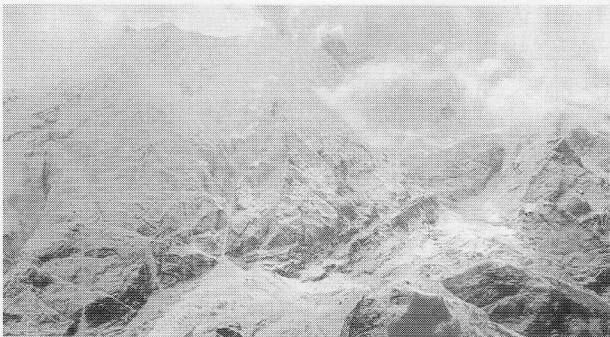
小休止後、左岸からブンゲンコーラに流れ込む小さな滝を目標にルートをたどる。わずかに30分でヤクの踏み跡にぶつかり、ここからはこれまでのガラ場と一転して、マナスル東尾根下部からブンゲンコーラにかけて広がる広大なラーメンカルカが目前にある。ここで初めて、ルート選択が間違っていたことに気づく。即ち、昼食を取った丘から直接コーラに下りるのではなく、左岸の草付きをたどり、この小滝に達した所でコーラに下りて横断することで約1時間節約できたことが分かった。

この地点からブンゲンゴンパを指し、カルカを斜めに横断する。途中、BCと、晴れていればP29が見える場所に手ごろな岩を見つけ、持参したタガネを使って「OUMC」を刻む。岩が硬く、ようやく薄く彫り終えたところで時間切れになってしまったが、まあまあ目的は達成することはできた。ここが今回の最高

到達地点3985m。この後ゴンパにお参りし、カルカを下る。カルカ末端に達した3時前から急にガスが巻いてくる。朝登った道を急いで下り、雨の中を4時半、キャンプサイト到着。

△追記▽今回はブンゲンコーラ左岸のルートを選んだが、3次、4次隊が取ったローから入る右岸のルートはマオイストの拠点となっており地元民も一切立ち入っていないこと、及び上部カルカが崩壊していることから選択できない。また、ブンゲンゴンパのあるラーメンカルカはヘリコプターも降りられ、水もあり、キャンプサイトに適している。

(昭和40年理学部卒)



P29東面 ブンゲン氷河左岸のカルカから。左上方がピーク。P29が間近に見えたのは、この時だけ=10月10日正午、前沢氏撮影

## 2日間のトレッキング

大野 義照

ポカラからの代表的なトレッキングコースは、アンナプルナBCへ向かうコースである。往復に約2週間を要する。今回は、そのコースの1、2日目をたどった。アンナプルナやマチャプチャリが、ポカラからよりもぐーんと近づいてくる。といって、白き峰々の前には前山があり、山村を結ぶ生活道路のような山道をたどる。アルプスやカナディアンロッキーのトレッキングが人里離れた山中をたどるのと比べて、ネパールのトレッキングは農家の軒先や田畑の中の道をたどり、人々の住まいや暮らしぶりに触れる面白さがある。

12日午前8時、サーダーとシエルパの2人が1975年製造のカローラをチャーターしてホテルに迎えに来た。スピードメーターは動かず、窓ガラスの開閉ハンドルはないが、走行に支障はない。一路、北に向かう。ポカラの郊外には、日本のどこにもあるような農村風景が広がっている。峠のノーダラ(標高1425m)を経てカール(1730m)まで約1時間。ここが今回のトレッキングの出発点で、車道から少し下って農家の間の山道を登る。スレート

石が丁寧に敷かれ、道の周辺に農家が点在している。家に帰る子供連れ、刈り取った草を担いで下ってくる姉弟、水牛追い、いろんな人に出会う。トレッキングは少ない。



人の土産物屋をのぞく。正月休みに日本入りに来た。トレッキングがドットと来るそうである。冬なら、天気も安定し、山もよく見えるだろう。

先程の合流点まで引き返し、さらに1時間歩いて、午後2時、宿泊地ダンブス(1770m)に到着。正面にアンナプルナ山群が見えるはずだが、雲に隠れている。数十軒の宿屋が街道沿いに並んでいる。それぞれテント泊まりトレッキングのキャンピング用に広い庭を持っている。夕刻、フランスの男女大学生の1団約20名がガイドとポーター連れで我々の宿



の近くのキャンプサイトに到着。ポーターがテントを張り、キッチンポーターが鶏を絞めている。鶏はどの家でも飼われているようで、村中どこでも歩き回っている。このグループは20日間でアンナプルナBCまで行ってきたとのことで、最後のキャンプは遅くまでにぎやかであった。ポーターは近くの民家の軒下でごろ寝していた。

我々の宿は15、6歳と思われる女の子が切り盛りしている。1階は食堂、2階の部屋はシーツのかかったベッドが2つ。サーダーが持つてきてくれたシユラフで寝た。窓からはマチャプチャリが正面に見える。同じ宿に現地ガイドを連れて日本人女性の2パーティーも泊まっていた。ほかに宿泊者はいない。1パーティーはカトマンズからポカラ経由で、1日でフェディからここまで歩いて来て、同じ道を引き返すとのこと。もう1パーティーは我々と同じコースをサランコットまで行き、そこで1泊すること。

13日、5時起床、快晴。日の出を見ようと高台へ。6時15分、日の出。アンナプルナ山群やマチャプチャリが朝日に輝く。その中を牛追いが牛を連れてカルカへ行く。鶏がえさをついばんでいる。8時半、出発。宿から数百メートルで集落は終わり、尾根の

南面に出る。しばらくスレート石の山道を下ると、農家が点在するようになり、刈り入れ前の稲田が続く。下りきったところでアマゴが泳いでいそうな谷川を石伝いに渡り、田んぼのあぜ道を上ると、前日、車で通ったノーダラに出た。

旧街道の両側には民家が続き。庭先にはヒエが干されている。世話をしているのは女性で、男どもはおしやべりか、茶店で玉突き要領で小さな丸いチップを手で飛ばすゲームで遊んでいる。車道を少し歩いて、尾根筋の旧街道に入る。両側に農家が点在し、稲田やヒエ田が続く。鎌での稲刈りも行われている。ダサインのお祭りでは学校は休みで、小学生が軒下で勉強をしている。算数の教科書は英語で、年かきの子が英語で話しかけてくる。この街道は尾根筋の南面を通っているの、アンナプルナ山群は見えない。面白さは村のたえずまいと人々の暮らしぶりが見えることである。カースキの茶店で、インド製の焼きそばの昼食。

午後3時前、ゴールのサランコット(1660m)に到着。歩いてきた尾根の東端に位置する、アンナプルナ山群の展望台だが、雲のため山々は見えない。眼下にはポカラ盆地が広がっている。サランコットは観光地で、宿屋や茶店、土産物屋も

多い。スレート石の急坂を下ると車道に出た。サーダーが往路のよりさらに古いカローラをチャーターしてきた。助手席に牧野さん、後部座席に運転助手も乗り込み、計6名。カーブの多い山道を冷や冷や下る。20分でホテルに無事帰着。

【今回の費用】一人70ドル(約8000円)。ガイド料、宿代、食事代、交通費すべて込み。宿のメニューによると、1泊1000ルピー(1600円)、料理1品50ルピー(80円)、ビール120ルピー。

## ヒマラヤへの散骨

坪井 和子

思いもかけなかったヒマラヤの旅に急ぎよ、娘と参加することになった。一昨年12月、突然、この世を去った主人、圭之助の長年の想いだったP29、マナスルのそびえる地に散骨



大先輩の住吉仙

してあげたい一心で、体力に大きな不安を抱えながら参加した。もともとは、也氏に、ヒマラヤへ行かれる際に散骨していただきたい、とお願いしていたのだが、住吉氏が「ドクターストップがかかって行けなくなった。

ぜひ、この計画に参加しなさい」と言われたのである。歩けば1週間以上かかるサマまでの行程をヘリコプターをチャーターして一挙に3300メートルまで登る。こんなチャンスはなかなかない。もしかして主人が自分の夢を私に託したのではないかという気がしてきて、参加に踏み切った。しかし、ヘリがサマガオンの広大な草原に降り立ったとたん、そんな不安はすべて吹き飛んでしまった。

翌朝、前夜の激しい雨はやんでいたが、山はほとんど雲に覆われていた。主人が多分、一番行きたかったであろうP29ベースキャンプへの散骨は野田さんに託した。ブンゲンゴンパへの途中の美しい池のほとりで、天気が良ければP29が正面に見える最高の場所に散骨していただき、ケルンまで作って下さったそうだ。帰国後、ケルンとその先に広がるP29、マナスルの写真やケルンをつくっていただいている写真を拝見して感無量だった。

私と娘は途中で皆と別れ、シエルバのリンジに同行してもらって、P29とマナスルがよく見えるというシヤウラ集落へ向かう。2時間ほど歩いて、集落の少し手前の展望の開けた所にリンジがいい場所を見つけてくれ、ヒマラヤ杉の茂る静かな山肌に散骨した。残念ながら、山は雲の

中だったが、ヒマラヤ杉の間から見えるマナスル北峰とマナスル氷河は壮大であった。ブリガンダキの水の音と可愛い小鳥のさえずりが悲しい心をいやしてくれた。ここで、いつも主人とそうしていたように、自然とスケッチブックに筆を走らせていた。絵を描いている間、シャウラの集落へ行っていたリンジが温かいハーブ入りの紅茶を運んで来てくれたので昼食にした。

サマでの3日目は、星が降るような夜明けを迎え、日の出とともにP29東尾根、マナスルの主峰と北峰、ナイケなどが、朝日に染まった見事な姿を現した。ここでもテントに近い小高い所を田島さんに掘っていただいて散骨し、皆にお線香を上げていただいた。当初のシナリオでは、ここで主人が昔よく歌っていた「雪

山讃歌」を娘がハーモニカで吹くことになっていたが、当人は夜中に星空の写真を撮りに出かけたまま帰ってこなかった。

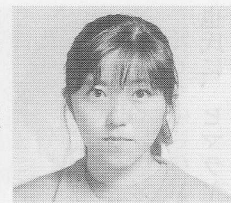
主人は3カ所で眠っている。P29とマナスルの懐深くに抱かれて眠っている。春夏秋冬それぞれのヒマラヤを永久に満喫できることでしょうか。思えば、すばらしい一周忌になりました。山友達の深い友情と、サーダー、シエルパの方々の本当に温かい心に深く感謝いたします。

(昭和33年薬学部卒)

## 自然にのみこまれた瞬間

坪井 実紀

私は、一昨年急逝した一登山家の娘である。父は、自分の経験については多くを語らず、ただ自然を愛する



者としてただ一人参加させていただいた。勝手に知らず、いろいろ迷惑をかけたしまったことを深くお詫びしたい。

私はこの年になっても、おてんばで、ちつぽけではあるが、父に似てか、ちよつとした冒険家である。それがトラブルを引き起こした。それも同行7人のみならず、シエルパ、キッチンボーイ、ポーターら総勢いったい何人！で大捜索という騒ぎになつてしまったのだ。

サマでの最後の夜は最高の天気だった。ようやく写真が撮れる。朝もきつと晴れるだろう。午前0時半ごろ、こっそり抜け出し、西の方角へ向かった。暫くすると暗闇に目が慣れ、五感がどんどん冴えてきた。マナスル山群は後方から月に照らされ、黒いシルエットがくつきりと見えていた。360度見直し、さらに川の音を聞き、草の香りのする空気を思いつきり吸い込んだ。興奮してきた。私はこの時、脈打っているかのような自然にすつかりのみこまれてしまった。足元の石ころやブッシュの茂

みとともに自分が固まってしまったようだった。

そうか、自分は地球上に転がっているんだな……などと、柄にもなく詩的なことを考えた。ポケーツと月とマナスル主峰を眺めている間に、シャッターチャンスは無情にも過ぎていた。その時、チベット側のパンプーチらしき山が最も月に照らされていた。とりあえず撮影後、2時半ごろ、テントに戻る。

4時過ぎの再出発を目標に、横になつて休む。帰る時間は食事時間にしてしよう(食事前のモーニングティーはいただかないことにして。これがいけなかった。母に伝えたつもりであつたが)と決めて再出発。とてつもなく寒い。完全装備で外に出ると、すばらしい星空が広がっていた。今まで見たこともない光景。星と共にP29東尾根が何よりも美しく輝いている。さつきも失敗したし、どうやったら写せるんだろう、と考えた。結局、神様お願い！と、勢いで撮った。それから、ずいぶん長い時間、微妙に変化していく光と影を見続けていた。

P29東尾根のさらに東の辺りがうすすら明るくなつてきた。そこで一枚撮ってから、初日に歩いて行ったヤクの放牧地(カルカ)に大慌てで向かった。久々にダッシュで走つて。



坪井氏の散骨の地に石を積むケルンを積む野田氏=10月10日正午、ブンゲン氷河左岸のカルカで、前沢氏撮影

るようにと育ててくれた。この旅は父の長年の思いをかなえるべく、P29の見える地に散骨を行うことが目的であった。そして、父



P29が少しでも良く見えることを願って。向かう方向はまだ暗闇。数頭のヤクを追い、カルカへ向かう少女や若者。そのうち、取りまとめる父親らしき人に出会う。彼はニコッと笑って、日の当たりだした山々を指差した。私もうなずいて山々を眺めてうなずき合った。「どうだい、実にきれいだろう」という言葉が目から読み取れたような気がした。

カルカに到着した時、ちょうどヤクが囲いの中に入り終わり、目の前で門を閉じられてしまった。ああしまった！。門を閉じた人と「ナマステ」と挨拶してしまっし、何となく忍び込みにくい。そこに入れば一段高く、遥かに見晴らしが良いのに……。そこで、大きな石ころが転がっている川岸を必死で駆け上がった。まるで小さい子供のように。何とか囲いの端の見晴らしのきく所にたどりつくくと、向こうには名も知らぬ低い山々が朝日に光っていた。嬉しかった。時計を見ると、帰る時間にあまり余裕なし。あわててシャツターを何度も押して、転げるように一気に駆け下りた。休むわけにはいかない。走った、走った。

すると、半分くらいもどったところで、シエルパのリンジが見えた。すぐにわかった。私は搜索されている。彼は相変わらず温かかった。

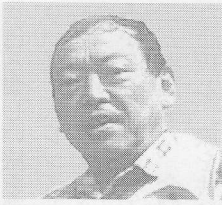
テントにたどり着いた時には、シエルパ語だろうか、「見つかった」と知らせる合図の大きな呼び声が響いていた。大野さんは、遠くまで探して行って下さり、行き違えてしまった。本当に迷惑をかけた。それも最高の晴天の朝に。

事のでん末はこんなところである。父は、元気な時はいつも、夜中からカメラを構えていた。もちろん、こんなバカはしなかつただろうが。

## パルスオキシメーターとガモウバッグ

前沢 祐一

平成12年春、あと2、3年は勤めるつもりでいたのに、60歳で年金生活者となつてしまった。ちょうど、そのころ、今回の「OUMCヒマラ



ヤの旅」の案内をもらったが、痛風の発症で足が腫れあがつて、とてもし

ツキングどころではないとあきらめていた。その後、まだ参加できることを知り、痛風の方も、ビールを絶つたり、食事に気をつけたりの涙ぐましい節制で治りつつあったので、急に行きたくなって申し込んだ。特別の準備もトレーニングもしな

いうちに、9月13日に出発前の打ち合わせが旅行代理店のTHI社であり、説明を受けた。その時の一番のポイントは急性高山病への対処法であった。今回の日程では、高所には3日間しかおらず、すぐにポカラへ下りるのが、約3400mのキャンプ地までヘリコプターで一気にかかること、そこから約4000mまで登ることから、「急性高山病の心配あり」とのことであった。そして、そのチェックのために「パルスオキシメーター」を使うこと、危険状態になつたら「ガモウバッグ」に入れて昇圧することと言われ、その使用方法を実習した。

ており、中指に挟んで10秒もすれば、血液中の酸素飽和度と脈拍が表示される。健康な若者なら、海拔0mでほぼ100%であるが、高所に上がるにつれて下がり、3000mで80%、50%を切ると危険状態で、すぐに下山させなければならぬとのこと。また、ガモウバッグは人1人が入れる気密性の袋で、これに患者を入れて足踏みポンプで加圧することで、高度を1000m程度下げ

洗滌ばさみを仕込んだような形をし

備として貸与された。そこで、今回の旅行中に何回か全員の酸素飽和度をメーターで計測した。代表的な数値を記録しておいたので記載する(表参照)。数値は、カ

酸素飽和度%/脈拍

隊員名	カトマンズ (1300m)	サマ (3300m)
田島	91/102	75/116
木村	94/122	86/107
坪井	93/90	70/104
坪井(実)	97/117	80/99
野田	92/113	88/100
前沢	95/87	77/102
牧野	92/110	82/107
大野	88/98	77/74

トマンズに到着した翌朝(飛行機の遅れで前夜は午前2時過ぎに就寝。寝不足)と、サマキャンプの翌朝(3300mで1泊後)で、まず適切な数値である。サマでは全員軽い高山病で、頭痛と食欲不振に見舞われた。2日目に3900m付近

まで登った後はかなり疲れた。

私の場合、高山病にかかったよう  
で、2日目にひどくバテたうえ、そ  
の晩は睡眠が浅く、夜中の2時に呼  
吸が苦しくて、起きあがってしまっ  
た。このまま苦しいようだと、同じ  
テントの野田さんに頼んで酸素を吸  
うか、ガモウバッグに入れてもらお  
うとさえ考えたが、頭痛薬と水を飲  
み、深呼吸して横になっているうち  
に、何とか眠ることが出来た。しか  
し、ポカラに下りてからも咳が絶え  
ず、ポカラ2日目の夜、また息苦し  
くなり、ピンクの血の混じった泡状  
のタンが出る始末だった。翌日は遠  
足を休んでホテルで休養していた。

この時、坪井さんが抗生物質をくだ  
さり、これで助かったように思う。

日本に帰ってから、自分の症状に  
興味があったので、『中高年登山者の  
ための生理学』という本を購入し、  
ヒマラヤトレッキングの項を調べて  
みたら、明らかに急性高山病で、「肺  
水腫」を起こしかけていたと考えら  
れる。幸い、今回は高所での滞在期  
間が短かったので重症にならずに済  
んだといえる。当初、せつかく33  
00㍎まで上がって、すぐ下りてく  
るという計画もつたないなどと思  
っていたが、とんでもない間違い  
だったと知った。

先のパルスメーターの数値に何か

兆候があるのだろうか？ そのつも  
りで数値を見ると、どうもサマでの  
絶対値ではなく、カトマンズからサ  
マへの低下は、小生が一番大きいよ  
うである。高山病に詳しい方のご意  
見をお聞きしたいところである。

幸い、大事に至らず、すばらしい  
景色と楽しい旅を満喫し、重い40  
0ミリズームレンズと三脚まで持つて  
いった甲斐あって、玉石混淆ではあ  
るが350ショット近い写真も撮る  
ことが出来た。今回の旅を計画され  
た諸氏と、旅を共にした諸氏に心か  
ら感謝いたします。

(昭和37年工学部卒)

## ヒマラヤの旅に参加して

木村 裕一

37年ぶりのネパール旅行で感じた

ことを断片的に  
報告します。



◇  
一、サマ周辺  
カトマンズから、  
ヘリコプターで、

ひとつ飛び、約45分でサマ集落のゴ  
ンパの上のカルカへ着陸。さしもの  
険しいブリガンダキ渓谷も、ここま  
で来ると広々とした草原で、灌木の  
紅葉が鮮やかであった。かつて、こ  
こはチベット難民のテントが並んで

いて、我々が足を踏み入れることの  
できなかった所である。今回のキャ  
ンプサイトは記憶にない。少し下っ  
た常設の広いキャンプサイトが、昔、  
テントを張った場所のようであった。

サマ集落は少し建物が増えたよう  
だった。たまたまは変わらないが、  
道標が立っていたり、ゴンパの建物  
が改装されて色鮮やかになっていた  
りで、学校もあるという。そして、  
間もなく自家発電で電灯がつくとの  
ことだった。

ブンゲンコーラをP29のベースキ  
ャンプに向かうも、ブンゲンゴンパ  
までも行けず、氷河湖の上までがや  
つとだった。ブンゲン氷河は著しく  
後退していて、遠望したところ、ベ  
ースキャンプ地点ではモレーンが1  
00㍎以上も沈没しているのには驚  
いた。

頭痛と極端な食欲不振は、明らか  
に高山病。シエルパの作ってくれた  
ご馳走にも手が出ず、残念だったが、  
朝のお粥は大変美味であった。37年  
ぶりのセンチメンタルジャーニーは  
大変タフな旅であった。

二、ポカラ サマから、ヘリで40  
分余り。昔、20日もかけて歩いたブ  
リガンダキの谷（河原沿いの道、絶  
壁を大きく高巻きする道、そして、  
小さな集落を串刺しにして続く道）  
を真下に俯瞰し、昔を思い出して感

慨に浸る。宿泊したシャングリラ・  
ビレッジホテルは、世界にも通用す  
るリゾートホテル。てんぷらうどん  
もあった。

絶世の美峰マチャプチャリ、変化  
に富んだアンナプルナ山群、遙かに  
望むマナスル三山、ダウラギリ等々  
を眺めながら、楽しい観光気分を満  
喫する。

最後の夜の全員での語らひは、酒  
あり、美笛あり（坪井さんのお嬢さ  
ん）、蛮声ありで、しばし青春時代に  
タイムスリップし、現役時代の話に  
花が咲いたり、歌が出たり。久しぶ  
りに心の底から和み、若やいだ気分  
に浸ることができた。

三、カトマンズ 牧歌的田舎町の  
風情だった昔とは様相一変。近郊の  
寺院の町バダガオンを除いては、全  
く見知らぬ街になっていた。

△終わりに▽今回のネパール旅行  
によって、遙かなるヒマラヤが身近  
な山に変わったが、一方で、登る目  
的から眺める対象になったことをい  
や応なしに実感させられた。

(昭和31年経済学部卒)

## 初めてのネパール

田島 汎

若い頃、山を志す者としては何と  
かしてヒマラヤに登りたいと思い詰



めたものだが、果たせぬまま今日に至ってしまった。この年になってはもう登るのは無理なので、せめて一度、この目にヒマラヤを焼き付けたと考えていたから、今回のネパール行きの話が出た時は、さすがにま飛びついたわけである。おかげでマナスルもアンナプルナも



しつかりと目に収め、本当に楽しい1週間を過ごすことができ、この国がすっかり気に入ってしまった。

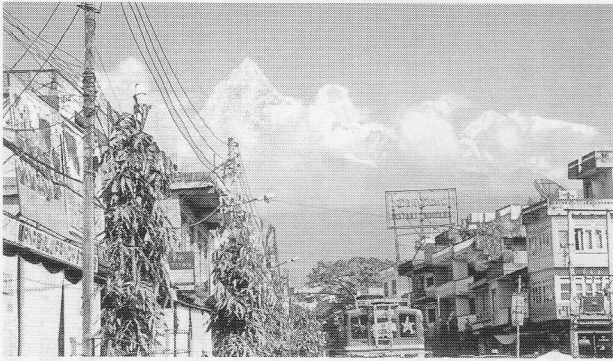
さて、そのネパール。初めての訪問であるから、以前のこととは人の話や文献による知識だが、非常に便利になったようである。何年も前からネパール専門の旅行会社ができていたが、最近では、主な旅行会社なら大抵、旅をセットしてくれる。首都カトマンズへは関西空港から直行便が週3便あり、上海経由で8時間ほどで到着する。しかも、現地では日本語のできるガイドが面倒を見てくれるから戸惑うこともない。

国内交通は、鉄道こそないが、主要都市は空路で結ばれているうえ、バス便が発達しているようで、カトマンズやポカラには大きなバスターミナルがある。バスのチャーター便も盛んで、団体のトレッカーたちは

もっぱら、これを利用していった。バスも行けないような山の中へはヘリコプターをチャーターする手もある。現に、われわれは、かつて1カ月近くかけてキャラバンをしたカトマンズからサマまでを、ヘリでわずか40分ほどで着いたのである。

一方、都市とその周辺ではタクシーの普及がめざましい。トレッキングの発着点などにも客待ちの車があり、料金も安いそうだから、近距離の移動には不自由はない。このタクシー、日本から中古を輸入したとおぼしき年代物で、トヨタOBの野田君を懐かしがらせていた。

ネパールは観光立国を目指してヒ



ボカラの街並み 正面がマチャブチャリ=10月14日、田島汎氏撮影

マラヤを売り出そうという方針のもと、トレッキングルートや宿泊施設の整備を進めているようで、サマにもちよつとしたロッジがあった。ただ、このロッジは炊事場と食堂と倉庫だけで、敷地の中にテントを張ってシユラフザックで寝るのだが、牧野、大野両君が行ったダンパスでは、ベッドもあり、食事もある本格的なロッジがあったそうだ。

現地で買った地図を見ると、そのようなロッジが主なルートの要所にあつて、トレッカーたちに便宜を図っている。そんなこともあつて世界各地からトレッカーがやって来ており、カトマンズやポカラのホテルでは、それらしき人たちに随分出会つたし、サマのような辺りな所でも1組が通過していったほどである。

それと、日本から来た者に便利なのは、日本語のできるシエルパがいることである。シエルパに日本語を教える施設があるとのことで、われわれのサーダーも日常会話は十分できた。歩くのは駄目という向きには観光フライトという手があり、地上とは違った角度からヒマラヤの景観が楽しめる。カトマンズやポカラの空港からは10〜20人乗りの双発機が盛んに離着陸していた。

都市部のホテルもなかなか立派なのが出来る。カトマンズで泊ま

ったロイヤルシンギも都市ホテルとして立派に通用するものだが、ボカラの街はずれのシャングリラ・ピレツジは特にすばらしかった。このホテルはリゾートタイプで、玄関あたりはさして立派ではないが、奥に手入れの行き届いた亜熱帯庭園が広がり、それに面してコテージ風の2人部屋が並んでいる。

部屋もゆつたりしており、最後の晩には8人全員が1室に集まってサヨナラパーティーをやることができただけである。庭園の一角にはプールやあずまやがあり、西欧人やインド人の家族連れが水浴びをしたり午睡を楽しんだりしていた。夜にはプールサイドで民族音楽の演奏があつたり、日によつてはバーベキューパーティーがあつたりする。

何よりうれしかったのは、晴れていれば正面にマチャブチャリを中心にアンナプルナ山塊が堂々とした姿を見せることである。かつては洗面所の湯が出ないことがあるなどといわれたネパールのホテルが、今回は全くそのようなこともなく、快適なホテルライフが送れた。

現在でも外国からの観光客は日本人が一番多いことだが、この国を訪れる人がもつともっと増えてもいいような気がする。

# 大阪大学山岳部 活動報告

2000年度

## リーダー所感

佐田 和也

今年度の活動では、何よりも夏山定着合宿での1年生の滑落事故と、予定したアイゼン合宿、冬山合宿ができなかったことが残念であった。



滑落事故の原因には、リーダー層の甘さと雪上訓練の不足が挙げられる。このことは、部員の登山技術の低下と、部に伝承されてきた技術がしっかりと現役部員に伝わっていないことの意味

する。数年前からの慢性的な部員不足に伴って、部としての枠組みが徐々に緩みだし、それが今回の事故につながったように思えてならない。事故後の大野部長、OB

を交えたミーティングで、安全確保の在り方を見直すと共に、部員の実力に見合った山行計画を立てることを確認した。

また、3人でやるはずだったアイゼン合宿は、うち2人が参加不能になり、合宿そのものがなくなった。冬山も、正月の富士山に登る話が浮上したが、結局、まとまらなかった。

部の運営が困難な中、どうしてもネガティブな面ばかりが目立ってしまうが、満足のいく合宿がなかったわけではない。春山合宿、新人歓迎合宿などは充実した山行であった。各部員がそれぞれ課題を持って山行に参加でき、少なくとも僕にとっては忘れ得ぬ貴重な経験となったばかりか、山岳部に入って良かったと素直に思えた合宿であった。

こういった状況下、新年度は3年生の高沢にチーフリーダーを、2年生の河野にサブリーダーを務めてもらうことになった。どうか、実力に見合った定期的な山行を精力的におこなってほしい。

### ◆春山合宿・八ヶ岳縦走など

【期間】3月3日～8日

【メンバー】佐田（L・3年）、高沢（2年）、田村、河野、丸岡（以上1年）、卯城（OB＝監督）

3日（晴れ）ピタラスロープウ

エイ（9・30）→坪庭（10・00）  
北横岳ピストン→坪庭（11・00）  
→縞枯山荘→枯草山→茶臼山（13・00）  
→麦草峠（14・00）  
→青苔荘（15・45）

枯草山の登りで、雪上歩行に不慣れた1年生たちがキックステップができず、余りにも苦しそうにしていたので、荷物を再分配した。蓬莱峡での歩行訓練とは勝手が違うようであった。それ以外はほぼコースタイム通りに進んだが、1年生の1人が遅れ気味で、休憩の際に個人装備の酸素を吸入していたのには驚いた。

4日（曇りのち吹雪）→出発（5・40）→高見石（6・40）→中山（7・55）→中山峠（9・00）  
→天狗ピーク（10・15）→根石岳（11・00）→根石小屋（12・00）  
→13・45）→夏沢峠（14・30）

出発時から曇り空だったが、岩場が続く天狗の登りで天候が急変し、大荒れとなった。1年生の1人のペースがやはり極端に遅く、途中で2パーティーに分かれてしまった。風が強く、先行パーティーが根石岳直下で行動を中止していたため、遅れた2人もほとんど合流した。その後、根石小屋で天候回復を待ち、風が若干収まったのを見計らって出発。樹林帯に入ってから悪天候の影響を受けずにすんだ。

5日（晴れ）→出発（5・00）  
→硫黄岳ピーク（7・50）  
→赤岳鉱泉（10・10）

前夜、テントが積雪で覆われて息苦しくなり、一度、除雪が必要であった。硫黄岳の登りでも1年生の1人が遅れ、2パーティーに分かれた。励ましながら歩いたが、あまり体を動かすことがなかった。寒くて仕方がなかった。赤岳鉱泉に到着後、1年生は下山し、2年生以上が翌日からの登はんに備えた。

6日（晴れ）→出発（6・00）  
→石尊稜→行者小屋→赤岳（11・30）  
→赤岳鉱泉（13・00）

石尊稜では取り付きがよく分ならず、もたついてしまい、結局、赤岳主稜に向かうことになった。文三郎道からフィックスで右ルンゼをトラバースして取り付きに到着。出だしは佐田がリードしたが、支点を作るのに手間取り、卯城さんに怒鳴られっぱなしであった。問題のチムニー状の凹角はほとんど雪に埋没しており、登はんはたやすかった。以後は岩壁と雪稜が繰り返す現れ、2つ目の雪壁で、ザイルを出していた先行パーティーを追い抜き、最後の岩壁ではセカンドの高沢のみを岩角を利用して確保した。残置ピストンは部分的にあったが、信用できそうなものは少なかった。支点には岩角、ブ



ツシュを使った方がいいだろう。正規のルートのやや左から強引にリッジに出たので、最後は雪稜を突き上げてピークに出た。

充実感の伴う行動ができて、非常に記憶に残った1日であった。

7日(曇り) 出発(6・00) — 中山尾根取り付き(6・50) — 登山開始(7・30) — 敗退決定(9・00) — 赤岳鉱泉(9・40)

前日に続いて3人で中山尾根の登はんをめざした。大きく開けた下部岩壁の1ピッチ目は、顕著な凹角を左上し、その上のリッジを左に回りこんで支点を作った。この凹角は赤岳主稜より難しく思えた。このピッチではセカンドの高沢のフォローに時間がかかり、下部岩壁を抜けるのに1時間半もかかってしまった。これでは核心の上部岩壁はなかなか抜けれないであろうという卯城さんの判断で、下部岩壁上部のブッシュで敗退を決断し、2ピッチ目終了後、懸垂で引き返した。

8日(曇り) 出発(6・00) — 阿弥陀岳北稜取り付き(9・10) — 阿弥陀岳ピーク(10・40) — 赤岳鉱泉(13・30) — 美濃戸口(15・20)

取り付きまでのラッセルが苦しかった。登はんを始めてからは2級程度の下部・上部岩壁が続き、いずれも確保の必要はなかった。

ホールドも大きく、ルートをどうとつても大差は無さそうだった。というものの、確保されずに登ると、それなりの緊張感を感じる。2つの岩壁を越えると、あとはやせ細った2、3層のリッジを馬乗りになって通過するだけでピークに出た。恐ろしかったのは、登山終了後にテント場に帰る際、赤岳とのコルの間から阿弥陀岳をトラバースした時で、雪崩れるのではないかと気が気でなかった。



春山 硫黄岳頂上で

◆新人歓迎合宿 穂高・酒沢

【期間】5月2日～6日

【メンバー】佐田(L・3年)、高沢(2年)、木島(3年)、田村、河野、高橋豊(以上1年)、卯城(OB)監督、寺田、尾崎、溝西

(以上OB)

2日(晴れ) 上高地(6・40) — 酒沢(14・40)

定着合宿だから、みんな、何か嗜好品を持ってくるだろうと思っていたら、余計な個人食を大量に持参したのは佐田だけであった。お陰で荷が重く、皆のペースについていくのに必死であった。設営後、夕方から雪が降りだし、夜半には雷がとどろいていた。1年生の高橋が雷の音にやたらと神経質になっていた。

3日(晴れ) 雪上訓練、雪洞掘り

酒沢小屋近くの斜面で雪上訓練をしたが、雪が腐っていて、滑落停止などの訓練に十分な成果が得られなかった。訓練終了後、現役は雪洞作りに励んだ。

4日(曇り) 出発(4・50) — 北穂ピーク(8・00) — 酒沢(10・20)

佐田、高沢、木島の3人は北穂東稜に向かうはずであったが、山小屋の人によると、今年は雪のつき方が悪いため、北穂東稜に向かったパーティーはゴジラの背を通り過ぎて、すべて撤退したとのこと。仕方なく全員での通常ルートからの北穂アタックに変更した。登りでは、雪上歩行に慣れていない1年生がやや遅れ気味であった。下りの際にゴジラの背を眺めたが、

とても直登は出来そうにない状態であった。寺田、尾崎は前穂北尾根登はん。

5日(晴れ) (3パーティーに分かれて行動)

△前穂北尾根II 佐田、卯城V 出発(4・30) — 5・6のCOL(5・30) — 3・4のCOL(6・40) — 3峰(11・00) — 前穂本峰(11・40) — 奥穂ピーク(15・00) — 酒沢(16・00)

5・6のCOLへの登りは、ひたすらジグザグに進んで高度を稼いだ。後ろのパーティーとの距離を測ろうと振り返った時の、朝焼けに染まった奥穂高岳の美しさに思わず見とれてしまった。5・6のCOLでは一匹の真っ白な雷鳥が迎えてくれ、ヘルメットを着けて登はんを開始した。5峰へはアイゼンの前爪を確実に利かせ、慎重に進んだ。続く4峰は、稜線上の巨岩の直前で左にルートを取り、回り込むように登ったが、ここも雪の状態が良かったので、たやすく越えられた。

3・4のCOLでは、先行パーティーが順番待ちをしており、その数に驚いた。我々が3峰の登りにかかったのは3時間後で、取り付いたときにはすっかり体が冷え切っていた。1ピッチ目は佐田がリードし、混雑の中で支点を作り、卯城さんのブレイをした。3級程

度の登はんで残置ピトンも豊富ではあったが、ルート図に書いているよりもかなり左に回りこまないと、4級の直登ルートに入ってしまうので要注意である。

このあと、ビレイ点で、卯城さんがザックを涸沢側に落としてしまい、これには度肝を抜かれた。卯城さんが「ラーク、ラーク」と叫んだので、落石かと思ったら、ザックが勢いよく壁を転げ落ちていくのが目に入った。後続パーティーが続々と来る中を懸垂するわけにもいかず、2ピッチ目は予定通り、卯城さんがリードして3峰は抜けた。2ピッチ目もホールド、残置ピトンが豊富で、支点は岩角で取った。振り返った際、北尾根の美しいラインに息を呑んだ。

2峰、1峰とも、基本的なアイゼンワークができれば問題となる個所はなく、あつという間に前穂のピークに立つことができた。ピークで、既にテント場に戻っていた高沢と交信した後、信じられないことに卯城さんは吊尾根の鞍部からザックを探しに涸沢に降りて行き、佐田は吊尾根、奥穂経由でテント場に帰った。

△北穂東稜登はん⇨高沢、尾崎▽雪のつき方が悪く、ゴジラの背が直登不能であったため、その直前で涸沢岳の方向に一度懸垂、回り込んで稜線に戻り、登はんを続

行。

△奥穂高往復⇨河野、田村、溝西。高橋豊、寺田は途中まで▽

6日(晴れ) 涸沢(7・00) — 上高地(11・30)

◆夏山定着合宿 剣岳・真砂沢

【期間】7月23日—26日

【メンバー】佐田(1)、高沢

(2年)、河野、高橋永次、高橋豊、沢田(以上1年)

23日(晴れ) 室堂(8・50) — 真砂沢テント場(15・30)

前回より残雪がかなり多かつた。剣沢の途中で、佐田が平蔵谷の偵察に行き、少なくともあと数日は通行可能であることを確認しておいた。

24日(晴れ) 出発(5・15) — 八ツ峰1・2のルンゼ(6・30) — 5・6の科尔(8・00) — 八ツ

峰の頭(正午) — 池ノ谷乗越(12・30) — 事故発生(12・40) — 負傷者を救出(13・25) — 剣沢との出合(18・30) — 真砂沢テント場(19・20)

長次郎谷との出合を経て、八ツ峰の1・2のルンゼまで一気に登り詰めたが、ルンゼには真ん中にぱっくりと大きなクレバスが生じている。取り付きは不可能と判断し、5・6の科尔から取り付くことにした。たとえ、クレバスを回り込んで無理に取り付いたとしても、上部岩壁の残雪状態は最悪であった。

5・6の科尔でヘルメットを着け、小さなクレバスを越えて6峰に取り付いた。不動岩でのトレーニングのおかげで登はん自体はたやすく感じられ、1年生たちも身軽に登っていった。7峰は自然と



新人歓迎合宿 北穂へのアタック

横を巻くようになっており、1カ所だけちよつとしたクライムダウンがあったが、ザイルを出すほどではなかった。

8峰の登りで、踏み跡にだまされ、チンネへのトラバースルートに入ってしまったが、すぐに引き返して8峰の直登にかかった。かなり岩がもろく、落石には細心の注意を払った。前のパーティーから断続的に起こる細かい落石に注意を要した。男性的な剣の岩峰に囲まれての登はんは非常に心地良かった。高沢が10メートルほどの懸垂を手早くセツトし、続く八ツ峰ノ頭への登りも問題なく終えた。このあたりから見えるクレオパトラニードルやチンネ左稜線の美しさが印象的であった。

長次郎谷を下り出してほどなく、1年生の高橋永次が雪面に尻もちをつくように滑落し、40〜50メートルのクレバスに転落する事故が起きた。現場に駆けつけたものの、負傷者の状態から自力下山は無理と判断し、無線で県警に救助を要請した。本人は視力の低下と腰の痛みを訴えていたが、やがて視力が回復し、自力で歩けると訴えたので、深さ2メートルほどのクレバスから救出し、自力で歩けることを確認した後、救助を断った。そこからブルージックで5ピッチ、ローワードウンで4ピッチ下り、以降は負傷者に肩を貸す形で下山した。剣沢との出合で県警と再度交信し、真砂沢に到着後、県警ならびに監督の卯城さん、負傷者の家族と交信し、事故の内容を伝えた。

幸い、全治2、3週間の腰痛で



済んだが、事故の主な原因は、十分な雪上訓練と事故現場でザイルを出していないかったことがあげられる。

25日(雨・沈殿)負傷者の腰の具合が思わしくなく、自力での歩行は不可能と思われたので沈殿とした。昼過ぎに高沢がスイカを切ってくれたが、複雑な味がした。

26日(晴れ)出発(7・00) | 室堂(13・30)

負傷者の荷物を皆で分配し、下山した。下山時には減っているはずの食料がたんまり残っており、剣沢を登り返すのは苦しかった。剣沢の小屋で事故の手続きを済ませ、重い足取りで室堂に向かった。

### ◆偵察山行・表銀座縦走

【期間】11月3日—5日

【メンバー】佐田(L・3年)、高沢(2年)、河野(1年)

3日(曇り)神城(6・00) | 中房温泉(9・20) | 合戦小屋(13・00) | 燕山荘(14・00)

この時期なら中房温泉まではタクシーで入れると聞いていたが、直前の大雨による土砂崩れで、神城のゲートが封鎖されていた。が、土砂崩れというのは、道の端がやや狭くなっているかいないかという程度のもので、パトロールの車が悠々と走っているのは非常に不可解に感じられた。合戦尾根は終

始、急登が続き、体力任せの1日であった。

4日(晴れ)出発(5・30) | 大天井岳(8・30) | 常念小屋(11・30) | 常念岳(13・20) | 幕営(15・00)

稜線上に全く雪がないのにはさすがに驚き、前回の偵察を思うと、山の様子とは同じ時期にこうも違うことがあるのかと感心してしまった。テント場からちようど3ピッチで大天井岳に着いた。天候はすばらしく、おまけに無風。山行としては非常に快適であったが、全く雪がない分、果たして冬山に向けての十分な偵察が行えたのかどうか、心配になってしまった。多分、コンディションとしては夏の縦走と何ら変わりがなかった。

問題となるのは、雪のせいで蛙岩を西側に巻かねばならない場合と、切通岩の梯子が埋没してしまった時のクライムダウン、完全に視界が利かない時に横通岳から間違った尾根に入らないことくらいであろうと思われる。

常念の登りで、佐田、河野が遅れ気味になり、蝶槍直前の樹林帯の中に設営した。

5日(晴れ)出発(5・30) | 蝶ヶ岳(7・50) | 徳沢(11・10) | 上高地(12・50)

3日連続で快晴が続き、単調過ぎて、やや物足りなかった。今年

の偵察合宿は、登はん具はおろか、アイゼンさえ装着することなく終わってしまったかと思うと、ザックの重さが気になって仕方なかった。長堀尾根は非常に長く、しかも樹林帯が続くので、雪が積もって夏のトレースが消えてしまつたり赤テープを探しながら進むことになりそうだった。

徳沢に下りてから上高地までは緊張感がなく、道のりが長く感じられて仕方なかった。

### ◆個人山行・表銀座縦走

【期間】5月8日—11日

【メンバー】佐田(3年)、高沢(2年)

8日(雨のち曇り)中房温泉(8・30) | 合戦小屋(11・45) | 燕山荘(13・10) | 燕ピーク(14・00) | テント場(14・30)

合戦尾根は第1ベンチのあたりから積雪が見られ、合戦小屋では雪は膝上までであった。断続的な雨の中、ヤッケを出したりしまったりの繰り返しであった。テントの中でくつろぐも、お互い無口で、ほとんど会話がなかった。

9日(晴れ)出発(5・40) | 大天井ピーク(9・40) | 大天井(13・50) | 常念小屋(16・50)

北鎌尾根の美しいラインを眺めながら快調に稜線を歩き、4ピッチで大天井岳に着いた。蛙岩、為右衛門吊岩とも雪のつき方が良く、

難なく通過できた。当初は、ここから喜作新道を辿り、東鎌尾根から槍に出る予定であったが、喜作新道をしばらく進んだところで、余りにも雪の状態が悪かったことなどから、横尾経由で槍に登ることにした。

一体、何のために登はん具を持ってきたのか、自分に問いかけながら常念に向かった。常念小屋に着いた時は2人ともかなり疲れていた。

10日(晴れ)出発(6・00) | 常念ピーク(7・40) | 蝶槍(11・40) | 横尾(13・10) | 槍沢ロッジ(15・30) | テント場(16・00)

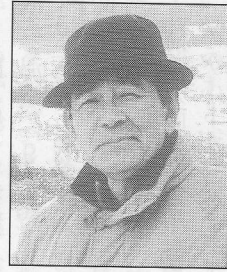
常念の下りから岩場が始まり、アイゼンを着けて、ゆつくり下った。蝶槍から横尾へのルートは雪が深く、樹林帯の中で時間を食うのではないかと思つたが、案外、雪の状態は良く、1時間余りで横尾に着いた。

11日(曇りのち晴れ)出発(4・30) | 槍岳山荘(7・30) | 槍アタック | 槍岳山荘(8・30) | テント場(10・00) | 横尾(12・30) | 上高地バスターミナル(17・00)

どんよりとした空の下、槍沢を突き上げた。槍に着いたころには青空が広がり、360度の素晴らしい展望を楽しめた。

(以上、佐田 和也記)

# 尾藤副会長が死去



本会副会長 尾藤昭二氏が3月19日午後7時59分、すい臓がんのため、兵庫県西宮市の明和病院で亡くなられました。73歳でした。  
葬儀・告別式は22日、西宮市六湛

寺町の楠会館でおこなわれ、本会会員をはじめ、阪大医学部関係者ら多数がお見送りしました。

尾藤氏は大阪市出身。天王寺中学、海軍経理学校、旧制大阪高等学校を経て、昭和30年阪大医学部卒。専門は脳神経外科で、阪大医局勤務を経て、40年から大阪厚生年金病院に勤務、脳神経外科部長、副院長を歴任されました。

山岳部時代は、積雪期の後立山縦走（昭和28年春）などのリーダーを務めたほか、本会初のヒマラヤ遠征である36年春の第1次P29登山隊にも参加されました。

## 「極地法」の推進者

川島 勇

尾藤君の訃報を聞く。創生後間もない阪大山岳部で、より高き山を目指して、共に語り、共に登った仲間一人として、本当に悲しい。

数多い彼との山行の中の主なものは次の通りである。

1952年（昭和27年）春山「小日向より不帰往復」。家田リーダーの下で、最初の極地法によるものであった。川島・尾藤がアタックに指名され、C3（天狗池）から不帰を越えて唐松岳に登頂した。

同年夏山「カクネ里合宿」。リーダー

1尾藤。この時、川島・坪井が直接尾根初登。

53年（昭和28年）春山「後立山逆縦走」。リーダー尾藤。アタック川島・住吉。完べきなサポート態勢に支えられて、針ノ木から白馬まで完全縦走。

同年冬山「天狗のコルより槍へ」（極地法）。リーダー川島。アタック川島・尾藤。この時初めてナイロンテントを使用した。C3（北穂）を出発して間もなく、尾藤のピッケルが折れた。一瞬、すべてが停止した。が、「行くこう」。彼の決然たる声でアタックを続行し、昼過ぎ、槍ヶ岳の頂上に立った。

尾藤君は知性を湛えた広い額と光のある眼を持った偉丈夫で、共に登る者に安心感を与えた。ち密な計画と冷静な判断力の持ち主でもあり、「時報」に寄せた彼の論文に「南アルプスの積雪と天候」（5号）と「極地法の運営」（6号）がある。

十数件の文献を調べたうえで、彼なりの主張を述べた、優れた論文である。「極地法の運営」では、ポッカの荷分けとキャンプのスピーディーな展開を重視する考え方を示している。これは53年の冬山「天狗のコルより槍へ」に生かされた。

尾藤君は、阪大山岳部が組織的登山の遂行能力を持つまでにレベルア



現役のころ 北穂高岳頂上で。後ろで立っているのが尾藤さん。前列左から木村、山本光、土屋=昭和29年1月3日

ップするのに大きく寄与したリーダーであったと思う。  
合掌  
（昭和29年工学部卒）

## 文武両道の達人

山本 光二

徳永篤司会長の死去を受けて会長代行をされていた尾藤昭二さんが、すい臓がんで亡くなりました。

昨年秋、大阪厚生年金病院にお見舞いに行った時は、大変お元気気で、ベッドに起き上がって、山岳会の将来について熱心に話しておられました。しかし、今年1月下旬の自著『近江道遙』の出版記念会では、紅茶を一口召し上がった以外、何も食べられなかったのを見て、暗然たる思いで帰路につきました。

尾藤さんは昭和25年に山岳部に入部し、28年春の後立山逆縦走の時のチーフリーダー、29年の厳冬の槍・穂高往復の縦走隊員など、数々の登山歴を残されました。36年の本会初のヒマラヤ遠征であるP29峰登山隊にも参加されました。

厚生年金病院を退職された後は、西宮市の三好病院に籍を置かれたわら、以前からの趣味であった琵琶湖周辺の歴史探訪に精力的に取り組み、病を得て後、『近江道遙』を出版、親しい方々に配られました。



霊の安からんことを祈ります。

合掌

(昭和29年法学部卒)

## 仙波 正さんが死去

二木 節夫

本会の特別会員であった仙波正さんが平成12年5月、岐阜の地で亡くなられました。

仙波さんは明治40年、福井県で生まれ、大阪工大卒業後、川崎造船所・飛行機工場に身を投じ、第2次世界大戦の激動期、戦闘機の生産に渾身の働きをされました。終戦時は38歳の働き盛りでした。その自分の半世を振り返り、死の直前に『飛行機に魅せられて』という手記を残されました。

その中に「山岳部」の部分

抜粋して、ここに記載します。

◇

山岳部のトレーニングはたいへんだった。山靴のクギは外に向けてある。六甲での岩登りトレーニングでは、割れ目を伝ったり、割れ目や出っ張りに手や足をかけて軽業のようなことを本格的にやるのには驚いた。二年生の山登りの名手には感服した。その影響で卒業まで山岳部において、あちこちの山に行った。

北アルプスの山歩きで、重いテントやリュックを背負って、徳本峠を越えて上高地に入ったこともある。今は名高い釜トンネルがあるが、当時は重い荷物を背負って、オッチラ

オッチラ、中ノ湯から細い峠道を歩いて越え、上高地へ入ったのである。途中でテントを張って何泊かしたが、そのときに柳屋の主人の版画家の弟

さんがいて、たいへん可愛がってもらった。

山岳遭難救援

事件があった。卒業を目の前にした昭和6年の秋のことである。山岳部若手の井戸、中川の二人が中央アルプスの宝剣岳に秋の

登山を試みるという計画を出してきた。井戸君はかなりのベテランだったから、うまくやってくると思ってた。送り出したが、帰阪予定時期が来ても帰って来ない。あちこちから問い合わせてくる。これはおかしい、ひよっとしたら遭難か。おまけに、その期間中に雨が降った。秋の冷雨は山ではたいへんだ。そこで急ぎよ救援隊を出すことになり、山岳部長の長谷山教授、山口ら幹部連中に尚助(仙波氏自身のこと)も加わって現地に向かった。大阪での待機、連絡等は別の連中に任せた。

現地は中央線の上松駅で降りて、そこから登るのである。上松駅前の旅館に宿をとり、近所の警察や町役場にいろいろお願いに上がる必要がある。長谷山教授、山口、尚助が救援隊となり、関係者を含めた現地派遣部隊を編成して出発した。現地では各部署の人達の絶大なご支援を得て、捜索に踏み切った。早速、長谷山教授、山口らは山靴を踏み鳴らして宝剣岳に登山を開始した。その辺り帯を付近の地方の有志、警察、強力たちを連れて捜索した。尚助はベイスで留守番と連絡役を仰せつかった。山の捜索を繰り返したが、何も痕跡が得られず、途中で二人とすれ違ったという情報もあったが、それは誤報だった。捜索は長引くものと

ご承知の通り、長身で、眉目すぐれ、かつての海軍経理学校在学を証明するかのように、スマートな海軍士官のイメージがびっぴりの人でした。ピアノを弾き、音楽を愛する優しさの一方、山では心身ともにあくまで強く、山岳部時代からヒマラヤまで、へばった姿を見たことはありませんでした。また、どんな困難な事態のもとでも、興奮して他人に怒鳴る場面もありませんでした。文武両道の達人とは、この人のためにあった言葉だと思っています。

私も参加した36年のP29峰遠征は、私たちにとって山岳部入部以来の成果を試す場でしたが、この時、足を踏み入れた西面には、当時の登山技術では登はんルートは発見できませんでした。加えて、遠征期間後半に、隊長の篠田先生が発病され、登山活動中止が決定的になってからは、クライマーとしての尾藤さんの顔が、次第に医師のそれに変ぼうしていったのを記憶しています。このころを境に尾藤さんは登山の実践活動から次第に離れ、本職の医療にまい進され、それを天職として究められたのではないかと思っています。

私たちは、この得難い人に山登りを通じて出会い、ずっと親しくお付き合いさせていただいたことを心から幸いに思っています。尾藤さんの



手記『飛行機に魅せられて』と仙波正さん

思われた。

長谷山教授は大学の関係で帰阪し、山口と尚助が現地に留まって搜索を続けることになった。大阪との連絡は国鉄の好意で中央線上松駅から大阪駅までの直通電話を使わせてもらうというたいへんな便宜を図って頂いた。

山頂付近を探すこと約20日間、寒気が迫って雪も降り出し、搜索が困難になってきたので、やむを得ず搜索を中止し、上松を引き上げて大阪に帰った。このとき上松で慰労の送別会をしてもらった。これは文字どおり現地の人たちの好意だった。田舎の人たちの、暖かくてありがたい、他人の好意」というものを経験した最初だった。

尚、遭難者の今後の搜索については、現地の人たちによくお願いをして引き上げてきた。その結果、翌春、昭和7年5月の雪解けと共に頂上の尾根下の谷間に二人の遺骸が見つかった。食糧も防寒具も手つかずで、そのままであった。秋雨による凍死であることが確実となった。

仙波さんは終戦後、川崎を退社され、戦時中の生産技術、能率改善の経験を生かして弁理士、技術士、中小企業診断士として特許事務所、能率研究所を経営され、多くの会社の

経営に関与されました。その功績によつて昭和47年に黄綬褒章、57年には勲五等瑞宝章を受章されました。

晩年は失明されましたが、頭脳の閃き、記憶力は最後まで衰えず、テープ19巻にも及ぶこの自伝をすべて資料なしで、記憶をたどつて口述されました。亡くなる1週間ほど前、私がお見舞いに参上した際も、昔話をはつきりした口調で話され、最後に「ごよなら」と言われたのが非常に印象的でした。

なお、この手記は遺族の方から阪大山岳会へ寄贈されましたので、戦争中の飛行機工場がいかなるものであったか、興味のある方は、ぜひ、ご覧ください。

(昭和29年工学部卒)

### 88人から66万円 50周年記念碑募金

当会創立50周年にちなむ記念碑建立募金では、多くの会員にご協力いただき、ありがとうございます。3月末現在、88人から計65万5000円が寄せられましたので、中間報告をさせていただきます。

碑は、当会ゆかりの長野県白馬村八方(旧細野)、対岳館敷地内に建てることで丸山庄司館主の了解を得られ、形状や碑文について最終的なつ

めを急いでいます。計画通り、今夏の「白馬集会」までに完成させ、集会時に落成式をと考えています。建立費用は100万円程度と見込まれ、これまでの寄金だけでは十分とは言えませんので、お忘れになっている方を含め、なお一層のご協力をお願い致します。

これまでにご寄金をされた方は次のみなさん。  
(卒業年次順)  
河原 璋(工12) 遠藤常忠(工13)  
吉田達三(工14) 新谷五郎(医14)  
川村 宏(工15) 奥村正己(工16)  
大島直義(工16) 盛岡鈴子(理甲浪高4回生) 村田良二郎(工20)  
友田洋一(医22) 大久保勝巳(医23) 伊藤俊夫(医23) 渡辺修治(医25) 加藤幹太(理27) 久保三朗(工27) 由比浜哲也(文28) 堺谷 弘(理28) 田島 汎(経28) 住吉仙也(医29) 川島 勇(工29) 近 璋三(工29) 二本節夫(工29) 大村一生(理29) 山本光二(法29) 東 雍(医30) 岩永 剛(医30) 尾藤昭二(医30) 三枝礼子(薬30) 広橋 茂(法30)

木村裕一(経31) 高木俊夫(理31) 山本進一郎(理31) 李中 勝(工31) 宍戸 元(医32) 西川元夫(工32) 細見一仁(歯32) 石沢命久(歯32) 片山 徹(医32) 辻川 眞(経32) 岡田博司(法33) 樋下重彦(工33) 坪井和子(薬33) 畑 幸代(文33)

米林外茂男(工35) 山本信樹(工35) 田端剛爾(工35) 平野恵一(工35) 平田 彰(経35)

玉井康雄(理36) 村井忠雄(工36) 田井英男(工36) 打出英樹(工37) 高橋雄二(工37) 米沢成二(工37) 前沢祐一(工37) 大角美佐子(薬37) 保母武彦(歯38) 大工原恭(歯38) 三沢日出夫(工38) 山本彰三(法38) 高田邦雄(経39) 木原秀幸(工39) 大川和秋(工39) 桑原昭夫(工40) 牧野大輔(理40) 播本裕晃(法40) 石浜高明(工41) 原 治左衛門(理42) 辻 信男(工42) 大野義照(工42) 糸井文彦(経42) 細川明彦(工44) 畑中 薫(医44) 甲田吉彦(基44) 黒田治朗(医44) 石原敏雄(理45) 鹿野信吾(理46) 中岡和哉(医46) 山田靖則(工46) 藪本 勝(工47) 高橋正身(理48) 上松一雄(工50) 松浦寿彦(工50) 大宅幸夫(歯51) 明神 知(基53) 森 保知(工54) 大西啓之(人62) 尾崎夏樹(経H7)

### 編集後記

今号はP29登頂記念トレッキング報告を中心にお届けします。編集の終盤で、尾藤副会長の訃報が入り、急ぎよ、追悼原稿を追加しました。このため、「会員の近況」は割愛させていただきました。

(会報担当・高田邦雄)